



414
A 715



北清日報抄記 三月十一日刊行

朝鮮事情 (投書)

大正十一年四月
天保使館郵奇贈

カ五口セス

七下

ぬ

送韓使ノ事既ニ終レリ予該國ノ事状ヲ少レク集録セ
レテ以テ今之ヲ足下ニ寄送セントス是レ實ニ緊要ナ
ル故アルニ非ス唯一時日本ニ於テ該國ヲ征服セント
スルノ策ヲ要ノラレシ時ニ際シ該國ノ思想言行ニ如
如ナル状態ナリシカヌ知ルベキ為メノ用意ナルウニ
方今朝鮮國ハ殆ト静謐ナルガ如ク國王未タ若年ニ在
レ氏能ク其統御ノ任ヲ尽セリト云ベシ既ニ昨年ニ於
テスラ諸般ノ事件ニ付キ國王ノ叡慮ニ出タリト稱ス
ル一屢々アリ此事若シ相違ナキナラハ是レ實ニ聰明
英大ノ國王ト云氏敢テ過当ニアラサルナリ今茲ニ教
件ヲ明示シテ此言ノ虚ナラサルヲ發セントス



國王手齡僅カニ二十四常ニ其父攝政ノ後見ラテ受テ人
ト為リレガ却テ其レカ為ノニ其權利及ニ健康ヲ害ス
ル一モ又久シカリキ方今ニ至テ自カラ統御ノ任ヲ總
ヘ親シク朝ニ臨テ能ク事ヲ裁決シ凡ソ名望アル者又
謹慎ノ聞ヘアル者ハ盡ク用ヒテ輔佐ノ臣トナセリ中
ニ就テ前攝政ノ兄則チ國王ノ伯父モ又當朝參政ノ一
員ニ在リ其名望頗アル高シ此人尊号ヲ興仁君ト云ヒ
曾テ攝政ノ暴政ヲ行フニ抵抗ヒシヲ以テ嚴ニ其擯作
ルル処トナリシガ偶(千八百七十三年十一月)攝政ノ左遷セラレテ
王政旧ニ復スルノ時ニ會セシニヨリ直チニ前任ニ復
レ現今ニ於テハ當國大臣ノ最モ貴顯ナル者トナレリ
此他大臣執政ノ輩皆之レヲ市井ノ中ニ奉タル者ノミ
今王ノ兄モ又其一員ニシテ且軍務大臣ノ任ヲ兼アリ

ゆゑ

前攝政大院君(國王ノ尊稱ニ與)ハ日後再ニ京師ニ歸任ス
ルト虽ニ然モ政府ノ公務ニ預カレテ得サルカ故ニ少
ク其權勢カダモ得ル能ハス加旃一ノ王宮中ニ幽閉
セラレ飯令ヒ旧ノ侍臣タリトモ容易ニ之レト通信ス
ルヲ許サレテ聖ナリ斯ノ如ク彼ヲシテ落魄ヒレシ
ハ衆説ニ依レバ未タ妙齡ナル王后ノ権力ニ出タリト
云蓋シ王后ハ頗フル聰明ノ婦人ニシテ其權威却テ今
王ヨリ重ク恰モ獨リ國君タルガ如クナル故ニ前攝政
ヲ擯作スルモ實ハ其權威ヲ逞フスルノ妨ケタルヲ思
フガ為ノナリ國人王后ヲ目シテ有テト稱スルト虽モ
曾テ尊信スル者ナク却テ其性質ノ善良ナラサルヲ誹
ル者アリ是等ノ事ハ措テ先フ最初ニ言フ可カリレ一
争ヤリ則チ今王ニ二人ノ世ヲアリ長ハ庶子ニシテ今

千載次ハ王后ニエン氏ノ産所ニシテ陸口ニ三歳ナ
リ
以上説ク処ノ大要ハ世人未タ前撥改ノ權ヲ執レル事
ヲ誤信スル者アラシク恐ルカ故ニ暫ク藉言スルノ
レ彼レハ既ニ總裁ノ任ニ在ルヲ得サルノレナラス今
王次ノ其他ノ者ニ對シテ少シ入推カダモ有セサル者
去秋軍艦一艘（本國）材木島ノ近傍ナルトヨシヨシ島ニ未
投錨シ數名水夫ヲ乗セテ六脚船ヲ卸シテカ
ホ華ノ近キエイロー島ハ漕寄セタリ是レ蓋レ塩水ヲ
未タレ為メナルベシ土人モ又此事ヲ云ヘリ然レニト
ユンジョンノ司長官ハ此景況ヲ見テ試カニ兵平ヲ出シ小
銃ヲ乘テ放テ夫ノ太柳船ヲ攻撃シ烈ク追逼リガ

ぬる

彼等ハ遂ニ遁レテ本艦ニ歸レリ此時歐洲ノ軍艦（本國）ヨ
リモ大砲ヲ發射スルニ西三彈ニテトヨシヨシノ民家
ニ破毀シ因テ何處トモナク漕去レリ司長官ハ最
初ノ一彈ヲ聞クマ否驚テ脱走セシガ後チニ國王ノ命
奉シタル左ノ公翰ヲ得タリ曰ク汝ハ外國船ノ靜カ
ニ我ノ海岸ニ投錨シ曾レ我レニ何テ暴害ヲモ為サ
ル者ニ對シテ何故發砲セシヤ然リ而シテ又何故岸怯
ニテ遁走セシヤ汝ハ司長官ノ任ニ當ラス故ニ今其職
ヲ貶シテ流刑ニ處スルナリ又以テトヨシヨシ縣ヲ廢シ
之レヲカンホア縣ニ合併シ司長官ヲ置カサルベシ朕
其軍艦ハ如何ナルモノカ又何等ノ為メニ此沿海ニ未
リレカヲ驚キ思フ処ナリト
トヨシヨシノ當テ（去秋）頃國王未タ若干ナレ其諸公翰ナルモ

嘗テ国王ニ披露スルコトク悉皆偽作ニ出ルコトヲ
始メテ發見シ大ニ逆怒スル所アリ次テ左ノ布令ヲ頒
行セラレタリ

政府ノ事務ニ就キ朕未タ其何事タルヲ知ラザル以
前汝等既ニ己ニ之レヲ諒知スル如シ是レ如何ナル
コトノ從來朕ニ宛タル書翰公書ノ類前以テ一度モ披露
見聞セシメサレハ却テ之ヲ偽造ト其可ナ
ル事ノハ朕ニ告ケ妨害アルコト朕ヲ知ラサラ
シム是ヲ以テ朕國事ノ如何ヲ詳明スルニ由ナレ是
等ノ事最モ禁止セザル可ラス因テ今此ニ布告ス凡
諸州諸国或ハ諸船ヨリシテ朕ニ呈セル公書ハ
大臣或ハ諸顯官ノ見聞セザル以前先ツ之レヲ朕ニ
呈シバシ若レ其レ返翰ヲ要スルガ如キハ朕自カラ

ぬ4

之レニ為スベシ
斯ノ如キ布告書ハ頂ク愉快ノ事ニシテ實ニ是レ緊要
ノ事也ナルノコト
方今諸司長官ハ都ヘテ其管轄地ニ居住スベキノ法ナ
從前攝政ノ旨及ヒ今王治政ノ始メニ當テハ司長官
常ニ京師ニ在ル者願フルカノレガ今王却テ之レ
善シクセス彼等ニ命ジテ曰ク從來汝等又当地ニ石
子常ニ日ヲ重子リ是レ良策ニ非ス因テ自後汝等
其管轄地ニ定住シ若シ決シ難キ事アル時ハ書面ヲ以
テ朕ニ奏セヨ勉メテ民治ヲ怠ルナカレト
儲テ之ヨリレテ戦争ノ始末ヲ詳説セントス(但シ戦争
ト云トモ只双方邊詰ノタルノミ曾テ日朝兩國間ノ報
知シテハ予諸新聞ニ出テ見ルニ朝鮮官負両名

文系完結ノ為ノ該國 在勤セル日本使節ト異
論セシヲ以テ斬首セラレタリト 千八百七十五年五月
廿四日刊行北清日報
然レ予ガ朝鮮ニ在ル朋友 報知ニ彼人曾テ是
等ノ事ヲ傳聞セシトモナレト云瓦来日本人ハ朝鮮ノ
東海及南東海ヲ通航スル一常 間断ナケレ氏未タ
嘗クカレホアリ地又ハ京師ニ来リシ由ヲ聞タル者ハ
一人モシ東海岸ニハ日本人河流ニ沂シシモ
一アリ又或ル時陸地ニ進入セシモアリタレ氏當時
シレヲ遮止セシトスル者一人モナク又一彈ヲモ發セ
サリキ是レ日本人ノ親ク云フ処ナルヲ以テ尽ク確實
ナリナリ然ルニ近來世間囂々トシテ穩カナラズ皆
人毎ニ今ニモ戦争ノ發起スルカノ如ク思ヘ做セリ中
ニ就テ大臣ノ一負ハ國王ニ建言シ專ク戦争ノ備ヲ

ぬふ

為サシテ請ヒ且明言シテ曰ク若シ來年ニ至テ戦争
ノ事ナクハ臣ノ身ヲ王ノ心ノ如ク行ヒ玉ヘ仮令ク死
刑ニ處セラルトモ恨ミナレト斯ノ如ク確乎タル明
言アルハ故ニ世人ノ慥カニ戦争アリト思フモ敢テ無
言ナラス而シテ夫ノ大臣ハ談書中又一語ヲ加ヘテ曰
ク往古我國日本ト大戰ヲ行ニシ時朝鮮國王或夜怪レ
夢想 感セリ其趣ハ王宮政所ノ中央ニ一人リノ
婦人頭上ニ穀物ヲ載セ忽然トシテ出來レリト王夢醒
メテ後テ快カラス曰テ其言凶ヲ匡官博士ニ問フ時ニ
一人進シ出テ曰ク婦人ノ頭ニ穀物ヲ載ケルハ文字ニ
就テ論スル時ハ是レ「委」ナリ而シテ婦人モ又人ナレハ
之レニ「イ」ヲ加フル時ハ則チ「倭」ナリ夫ノ日本ヲ「倭」ト云
テ案スルニ國王ノ夢恐ラクハ日本人来テ我ト戦

北ナヲト此時ニ於テ人モ日本人ノ攻メ来ラ
ンヲ思ヒ得タル者ナキカ故ニ大ニ嚮キノ判断ヲ非ナ
リトシ遂ニ彼人ヲ流刑ニ處シタ其後同人ハ一ツ年
島中ニ在リシカ果シテ日本ヨリ攻来ルコトアリ彼其時
用ヒラレテ案内者ホナリシト云
備テ今田ノ事モ又夢想ノ前兆ナリシヤ否知ラサレ
朝鮮ニ一ノ只顧日本人ト戦フヘキノ備ヘテ吾人新
タニ数艘ノ軍船ヲ造営スリ但シ英軍艦ニ二種アリ一
ハ亀甲船ノ如ク一ハ鴨頭船ノ如ク亀甲船ハ京師ニ於
テ造営セシモノニ艘アリ予ガ探訪者ハ之レヲ一見シ
テ頗ル秘密ニシテ綴ニ熟覽スルヲ得サルカ故
ニ詳カニ其模形ヲ通知スルヲ得スト云然シ其大畧ヲ
同クニ此船ノ大サ五六十人ヲ容ルベク全体鉄ヲ以テ

ぬゝ

覆ヒ水中ニ沈テ進ムヲ得ニシト又鴨頭船ハ他ノ船ト
大ニ其形ヲ異ニシ船首ニ凸出シタル堅牢ナルヲム
カ者著ケテ此処ニ大炮ヲ備ヘテ恰モ鴨頭ト同形ナリ
是等ノ奇態ノ新發明ニ就テハ予妄リニ間然スルヲ願
ハス次ニ又夥多ノ水雷火ヲ製造セリ其形チ中央ヲ空
虚ニシテ巨大ノ銃丸ニシテ外面ニ銃尖ヲ數所ニ附ケ
タルモノナリ此銃尖ハ敵船ノ船体ニ付ケシモノナリ此銃丸ハ
中ニ火薬ヲ充分ニ詰メ又導火管ヲ附クルモノナレバ
其用ニル時ニ目的ノ遠近ニ從テ之レヲ加減ス其用法
ハ預メ目的ヲ見定テ放ツヲ要スルナリ若シ敵船ニ適
中シテ法ノ如ク回著スル時ハ其形一挙ニ碎スベ
シ是レ當時試檢スル処ニシテ充分ノ出来栄ナレバ
ハ予今更ニ其成績ヲ顧慮スルヲ要

慢心ヲ激動セシナルベシ其試験ノ景況ヲ聞クニ最初
ハ空船ヲ浮ヘテ水雷火ヲ用ヒテシガ該船ノ帆樫船
体ヲ離レテ五十ヤルト（一カマルト）ノ空中ニ飛揚シ船
体ハ沈没セリト又再度ノ試験ニハ漁船ニ夥多ノ
石塊ヲ積ミタルヲ用ヒシニ該船粉ノ如ク碎ケタリト
此他又霰彈ヲ装入レタル一種ノ爆彈砲ヲ造リ此爆
彈地ニ落ルヤ否ヤ其外面破裂シ中ニ装入セル散彈發
出シテ四方ヲ破毀スハキ装置ナリ此ニ是等ノ新發明
ハ實ニ是レ一ニノ朝鮮人ノ意見ニ出タルモノニテ彼
等ハ之レヲ以テ充分其國ヲ防禦スルニ足ルベシト信
任コリ之レニ因テ見レハ朝鮮人ハ只顧其國ノ防禦法
未ク且其心ニ於テ日本人ヨリ遙カニ優等ナラシ
ム

ぬワ

予茲ニ華ヲ摑ントスルニ際シ又テ話ノ足下ニ寄送ス
ル事アリ北部ノ重立タル地方ニ於テ朝鮮人等小漁
船ニ巨大ノ太砲ヲ設置セントテカヲ吞セシガ僅カニ
一彈發射スルヤ否ヤ漁船忽テ顛覆シ隣ムヘシ船人大
砲又ニ砲手トモ全ク沈没シタリ此時陸上ニ羣集セシ
見物人ハ此有様ヲ見テ思ハズ聲シク声ヲ放テ大突シ
タリキ然シ幸ニ漁船モ再ニ水ニ浮ヒ出テ又同時ニ
沈没セシ者ニ唯一時落膽セシムニテ別義ナカリ
ト云予想フニ朝鮮人等今番ノ事ニ因テ大ニ恐怖ヲ
生シ以來ハ大船ニ小砲ヲ設置スルナラシカ
以上説ク処ノ外現今足下ニ通知スベキ格別ノ要件モ
ナシ餘ノ事ヲ寄送スルヲ以テ大抵既ニ足下ノ知ル所

ノ
カ
シ
於牛莊二月十一日

ロ
コ
レ
ア
ヌ
ス

大
政
官